

## 1.1 ● 薬剤師が身につけるべき一番の技術とは何か？

私は以前18年間勤務していた某国立大学附属病院薬剤部で、6年ほど薬学生実務実習の教育担当責任者を務めた。主に4年次の薬学生と大学院生が、薬剤部で実習をした（当時は薬学部は4年制カリキュラムで、4年次が学部最終年次であった）。

実習をはじめると、筆者が薬学生に必ず質問していた重要なことが1つだけある。それは、「熟練した内科医と薬剤師の、薬に対する考え方の大きな違いは何ですか？」というものであった。学生は皆、口を閉じてしまい、沈黙が続くのである。その状況は私には容易に予測できた。なぜならば、薬剤師である筆者自身、この問題にもがき苦しみながら十年以上も解答を出せなかった経験を持つからである。では、その答えを極めて簡単に述べることにする。

熟練した内科医は、現在使用している薬（A薬）が患者にどうしても効きにくい場合、これまでの経験からB薬に変更する。一方、薬剤師は、B薬への変更はこの患者に対し未知の薬を投与するのと同じ危険性を持つことを認識し、



医師と薬剤師の薬に対する考え方。医師は薬の種類を変更。薬剤師は薬の効果を最大限に引き出すを試みる。

**薬学に基づく技（薬術）を使ってA薬の効果を最大限に引き出すことを試みる、**  
というものである。

熟練した薬剤師は、「薬を変える」のではなく、「薬の効果を最大限に引き出す」技を持つべきなのである。

私は病棟で長年整形外科の薬剤管理指導業務\*を担当していた。そして、ときに、これまで何年も歩けなかった患者さんが手術を受けたあと、笑みをいっぱいにして歩いているのを目の当たりにすることがあった。そのとき、筆者は整形外科医の手術はまさに神業だと思ったのである。

それでは、薬剤師による神業とは何だろうか、と考えたとき前述の答え（熟練した薬剤師は、「薬を変える」のではなく、「薬の効果を最大限に引き出す」技を持つ。それは、薬物治療において、患者の苦しみを抜いて薬を与えることにつながる）に到達したのである。

**つまり、薬剤師にとっての神業とは、薬効を最大限に引き出すタイミングを見極め、効きにくい薬をたとえ減量したとしても高めることができる技のことである。**筆者は、この技術を抜きにして薬剤師の生き残りはありえないと確信している。

柔道で「柔よく剛を制す」つまり“相手の力を利用して相手を制する”という言葉がある。もっと具体的に説明すると、大きい者が小さい者を力づくで倒そうと攻めてきたその瞬間、つまりその絶妙なタイミングで小さい者が技をかけ大きい相手を投げ飛ばすということである。この絶妙なタイミングを見極め利用することが優れた技となるのである。ここに“感動”が生まれるのである。薬剤師も絶妙な投与タイミングを見極め薬の効果を最大限に引き出す新技術（薬術）を手に入れば、あらゆる薬において効果的な薬物治療が可能となり、社会に感動を与えることができる。もちろん、薬剤師自身、感動を手に入ることとなる。この「薬術」に関しては2章で詳しく述べる。

---

\* **薬剤管理指導業務**：すでに病棟で投薬されている患者に対する薬剤業務であり、薬歴の確認を通し、処方内容の確認（薬剤の投与量、投与方法、相互作用、重複投与、配合変化、配合禁忌等の確認）を行い、投薬の妥当性を再確認する。さらに、ハイリスク薬および麻薬等が投与される患者に対し薬学的管理を行い、患者からの相談に対応する。退院後も適切な薬物療法が継続できるように指導を行う。